遠藤周作の『深い河』研究
－神の形象化と意味を中心に－

金　恩暎

キーワード　*遠藤周作、神、キリスト教、母性的な存在、愛の働き*

1．はじめに

近・現代の日本文学を研究する時、見逃せない大事なことのひとつに作家とキリスト教との関わりがある。数多くの日本近・現代文学が西欧から流入された文学作品と、その中心にあるキリスト教から多くの影響を受けていたからである。しかし、初めは愛と平等を基調とする人道主義を求めてキリスト教に帰依した日本の文学者の多くは、唯一神信仰の宗教に適応せず、直ぐキリスト教の受容に冷淡になってしまった。多神的で汎神的な宗教風土で育った日本人の国民情緒に、唯一神を信ずるキリスト教はあまり合わなかったためである。

こういう情緒は遠藤周作（1923～1996）も同じで、彼は母親によってキリスト教に入信したカトリック信者であったが、日本的風土とキリスト教との間で絶え間なく葛藤していた作家であった。しかし、注目すべきは、遠藤は他の文学者と違って、自ら「体に合わない洋服」のように感じたキリスト教を、ただむやみに棄てようとはしなかったことである。言いかえれば、彼はこの「体に合わない洋服」を和服に仕立て直すことに、自分の作家としての目標をおいたのである。だから彼の作品には、いつも「日本人とキリスト教」というテーマが中心をなしている。

このような点を念頭において、本稿では遠藤文学のキーワードである神がどのように形象化され、どういう意味を持っているかに焦点を合わせて、主題への接近を試みる。なかでも本稿で扱う『深い河』は、彼が一生涯かかって探そうとした神の意味がまとめられた、遠藤文学の最後の代表作である点で重要な意味をもつ。それ故に、ここでは『深い河』を中心に、前期と中期の代表作『海と毒薬』と『沈黙』、『母なるもの』などを参考にしながら、作品の中に現れた神の意味を探ってみることにする。

2．母性的な存在としての神

エリーヒ・フロムは『愛するということ』で、いろいろな形態の愛の中で最も価値の高いものは母性愛であると述べている。彼の言葉を強いて借りなくても、母性愛がこの世で一番尊貴な愛の形態であるのは言うまでもない。遠藤にも母性愛は至高のものであって、彼はイエスの愛を母性愛と連結させていた。こういう傾向は、特にキリスト教の土着化を試みていた中期の作『沈黙』や『母なるもの』などの以降にもっと著しくなる。遠藤は汎神論的な日本の風土と唯一神だけを強要するキリスト教思想の根本的な擦れ違いの間に立って、絶え間なく苦労していた作家であったから、日本人の情緒に合う日本化された神の土着化を文学活動の基盤にしていた。彼が日本化された神の性格に選んだのは、新約に描写されたイエスのやさしさであった。日本の土壌を「父なる宗教は育たず、母なる宗教が栄える」土壌だと見る作家が日本的な神として選択したのは、子のため自分を犠牲する母親が子の誤りを許してくれるように、自分の罪を許し、愛してくれる母性的な神であった[1]。

ところで、遠藤の信仰が、篤実なカトリック信者であった母親の影響から始まったのは周知の事実である。遠藤は、日本人の感性で育ってきた自分とキリスト教とがよくかみ合わないという気持ちをずっと感じてはいたが、キリスト教を決して棄てなかった。彼は、キリスト教をただむやみに棄てるのを母親に対する不孝のように思っていた。それ故、次に作品のなかに描かれた母性的な神について論ずる前に、原体験としての遠藤と母親との関わりをまず探ってみよう。

2.1 母親郁と彼女の影響

遠藤の母親郁は、幸田露伴の妹安藤幸子とともにモギレフスキーにヴァイオリンを師事したインテリ女性である。遠藤が記憶する彼女は、結婚して夫に従って行った満州で熱心にヴァイオリンを演奏する人で、「母は非常な勉強家で、一日に四、五時間は絶えずヴァイオリンの練習をし、冬の寒い時などヴァイオリンの糸で指が破れ、ピッピッと血がとび散ったのを見たことがある」[2]とも言っ

---

[1] 「宗教には二つある。「父なる宗教」と「母なる宗教」である。「父なる宗教」が旧約の神のように悪を責め、怒り裁くなら「母なる宗教」は悔いたものを許し、愛してくれるのである。日本には父なる宗教は育たず、母なる宗教が栄えるというのは私の考えだ」遠藤周作『ほんとうの私を求めて』（集英社、1995）164頁

[2] 遠藤周作上掲書 148頁

ているほどである。懸命にヴァイオリンを練習する母親から遠藤は、芸術家に対する尊敬心を習った。夫と一緒に満州で生活していた彼女は遠藤が十歳であった1933年、不安定であった結婚生活に終止符を打ち日本に帰った後、キリスト教に深く帰依した。遠藤もカトリックに入り、十二歳[3]頃に洗礼を受ける。しかし、これは切実な信仰心から始まったのではなく、単に不覚に取り入れられたのにすぎなかった。遠藤は幼少時代教会に行くのが嫌だった自分が、「教会のいちばん後ろの椅子に腰掛けて公教要理を習ったり」[4]しながらもキリスト教を棄てられなかったのは、母親に対する愛着に由来したのだと、作品とエッセイなどでたびたび話している。実際、遠藤は日本に帰って洗礼を受けるまでは母親と一緒に生活したが、すぐ父親のそばへ行った。この頃の事情は詳しく知られないが、夫から棄てられた母親を離れて父親にもどるこの事件は、彼を背反者のような気持ちにしていたのかもしれない。なぜなら、彼は佐藤泰正との対談で次のように言っているからである。

> 私にとって『母なるもの』というのは、聖母マリアとかくれ切支丹の関係と相似しています。かくれ切支丹が聖母マリアを求めたのは、かくれ切支丹は、はっきりいったら全部裏切り者ですね。毎年毎年、踏絵を踏まなくちゃ生きていけない。…＜中略＞…　だから彼らは、そういう自分の卑怯さと弱さを許してくれるものを切にほしがったからだろうとおもう。同時に逆に自分のうしろめたさというものをいつも感じていた。…＜中略＞…そのうしろめたさというものは、私が自分を投影して感じたものかもわからない[5]。

幼少時代、離婚する両親の間で感じた彼の葛藤は、『母なるもの』にもよく表れている。とにかく、はじめは母に従って日本に帰った遠藤が、父のもとで感じたのは、母を裏切った子の心情であったのにちがいない。だから、母親が信じるキリスト教を＜自分の体に合わない＞としてすぐ脱ぐのは、母に対する二度の背反のような心情になっただろう。従って、キリスト教は遠藤において始めから母性的なものと深く関わっていた。

一般的に母は子を庇う、子に代わって命も惜しまない、そして、やさしい慈

---

[3] 対談集『人生の同伴者』の後記の年譜には遠藤が洗礼を受けたのを十一歳であった1934年頃のだと述べているが、村松剛は十二歳であった1935年の頃だと書いているなど、洗礼の時期は明らかでない。しかし、遠藤自身が『私のイエス』の序文で洗礼を受けたのは十二歳の頃だと言っているから、本稿では遠藤の言葉に従って十二歳の頃とする。

[4] 遠藤周作『私のイエス』（祥伝社、1988）３－４頁

[5] 佐藤泰正・遠藤周作『人生の同伴者』（新潮社、1993）26頁

愛心のある存在である。遠藤の母親も、いくら強靭で激しく生きていく女であったとしても、母性的存在である以上、厳しい父親よりはやさしい存在であった。遠藤の宗教的な信念を「転びクリスチャンにすらイエスの許しと恩寵のまなざしは注がれる」のだと見る梅原猛[6]の言葉どおり、遠藤は厳しい父親でなく、母親郁によって着せられたキリスト教に戸惑いながらも、母親をがっかりさせて裏切った自分のうしろめたさ、即ち罪責感を許してくれる母性的神を必要とした。そしてキリスト教の神イエスに見られる優しさを選択して、日本的な神、換言すれば母性的な神として変容させていた。次に作品のなかに描かれた母性的な存在としての神の姿を、もっと具体的に探ってみよう。

3.小説のなかに現れた母性的な存在としての神

3.1 『海と毒薬』の場合

初期の作『海と毒薬』には聖母マリア型[7]の女性であるヒルダが登場している。ヒルダはドイツの女で、ドイツで留学した外科部長橋本がそこの病院で会って恋愛結婚した相手である。彼女は一ケ月に三回病院を訪れ、自分が直接焼いたビスケットを患者に配り、患者たちの汚れた洗濯物を取り込んで洗濯したりする。ところが、日本人の目に映ったヒルダの外見は、女性的というよりはむしろ「たくましい男性」(90頁)に近い。行動も子供を「犬をよぶように口笛を吸いて」(92頁)呼びだしているし、「男の子のように大股で病院を歩き、ビスケットを配り、患者をせきたてて汚れ物をバスケットに入れて歩く」(91頁)などたくましい風貌である。そのようにたくましいヒルダを、看護婦たちは悪く言ったりする。しかし、それまで何の反感も持っていなかった上田ノブは、ある日、子供に触ろうと手をのばす自分に「触れないで下さい」(92頁)というヒルダの厳しい声から、「母親のきびしい声」をきいて突然反感をもつ。男性的なヒルダの姿と行動にもかかわらず、上田ノブはヒルダから、自分には決してできなかった母性を感じたのである[8]。男性的な女ヒルダから上田ノブが感じる反感は、母親としてのヒルダに対する嫉妬である。患者を殺そうとした

---

6 梅原猛「二つの顔をもつ文学者」『遠藤周作の世界』(朝日新聞社、1997)70頁

7 遠藤は『聖書の中の女たち』で女性を聖母マリア型、イブ型、ヴィナス型の三つに分類し、聖書と関係のないヴィナス型は別として、イブ型の女は誘惑者エバである反面、聖母マリア型の女は慈悲なる存在として説明している。

8 上田ノブは一度結婚し妊娠もするが、乳児は死産に終わり、母体を救うため女の生理も根こそぎにえぐりとられねばならなかったため、子供を持てない女になってしまう。

上田ノブを叱って病院を休職させるなどの厳しさにおいてもヒルダには父性的で、男性的な面が多く見られる。許しと慈悲の母親というよりは、むしろ責めて罰する父親の姿がもっと連想される人物である。でも、彼女は母親であり、少しだけではあるが聖女のような風貌を持っている。しかし、遠藤は初期作品において神の土着化よりは真正の意味で神がない日本人の罪意識に関する問題に没頭していたから、この作品ではヒルダを上田ノブより優越した存在、聖女の顔をした女性として描いているだけで、母性的な神の姿が具体的に現れてはいない。ただ作品のなかで、戸田が息子を待つため、かろうじて命を延ばしたが、結局は死んでしまう老婆に恋々とする勝呂に「おばはんも一種、お前の神みたいなものやったかもしれんな」(80頁) という一言を通して、作家が息子を待つ老婆の哀れな母親の姿から母性的な存在としての神を見たのが微かに見えるだけである。

3.2　『沈黙』と『母なるもの』の場合

遠藤が本格的に神を母性化し始めるのは、病床体験以降書いた『沈黙』からである。病床体験中、遠藤の脳裡に浮んだのは長崎で見た踏絵に描かれたイエスの顔ばかりであった[9]。三回の大手術を通して死を目撃した作家が病床で思った神は、人々に踏まれ、歪められながらもこれらを理解し悲しい目で見詰めるイエスの顔であった。イエスの愛の視線はすぐ母性愛と連結され、踏絵のイエスの顔から遠藤は神を母性化していた。

> 踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから (240頁)

上記はポルトガルの神父ロドリゴがいかんともしがたい状況で踏絵の前に引っ張られる時、聞こえる神の声である。背教するクリスチャンに「踏むがいい」と叫ぶ神の声には子の間違いを無条件的に許す母親の母性愛が籠っている。踏絵の中の神は、裏切り者に許しと恩寵の視線を注いでいるのである。神を裏切って踏絵をしなければならなかった弱者を理解して「お前たちのその痛さと苦しみをわかちあう」という神の声は、子の苦痛をわかちあう母性的な存在としての神の声そのものである。

『沈黙』以後の作品『母なるもの』は、神を母性化し始めた遠藤が本格的に

---

[9] 佐藤泰正・遠藤周作『人生の同伴者』(新潮社、1993) 138－140頁

母親と信仰の関係を交叉して書いた作品で、『沈黙』で父性的な神の沈黙を破って「踏んでもいい」と叫んだ母性的な神が、もっとも具体的にまとめられている。

> 彼らは自分たちの弱さが、聖母のとりなしで許されることだけを祈ったのである。なぜなら、かくれたちにとって、デウスは、きびしい父のような存在だったから子供が母に父へのとりなしを頼むように、かくれたちはサンタマリアに、とりなしを祈ったのだ。かくれたちにマリア信仰がつよく、マリア観音を特に礼拝したのもそのためだと私は思うようになった。(240頁)

ここでの彼らとは隠れキリシタンたちである。隠れキリシタンたちは、まるで子が母に父親との仲裁を頼むがごとく、彼らは聖母マリアに神とのとりなしを祈る。自分らの罪、背教の罪を許されるため隠れキリシタンたちはあらゆる人々の母親、即ち母性の象徴である聖母マリアに祈祷を捧げている。彼らの祈りを捧げる存在はイエスキリストでも、エホバでもなく、聖母マリアである。隠れキリシタンたちの祈祷はカトリックの聖母マリアへのお祈りとも似ている。カトリックのお祈りの<恵み溢れる聖マリア……罪深い我たちのために、今も、死を迎える時も祈ってください>という句と、サンタマリアに父なる神エホバとの仲裁を頼んでいるのは一脈相通する。この点で彼らは確にカトリック的な面はある。しかし、一種の迷信みたいに思われるのは、隠れキリシタンたちがキリスト教を指導者や教会もなく、信じている間にキリスト教を自己流に屈折させて信じるようになって、彼らの宗教は土俗迷信や仏教、神道と混ざり合って変容されてしまったことだ。そして、その変容の特徴の一つは、彼らの信じていた神がいつの間にか聖母マリアへの、そして、聖母マリアをまねたさまざまな土着神々への崇拝に変った点である。実際、日本の隠れキリシタンたちの間には、聖母マリアの絵とマリア観音が数多く見られる[10]。同様に、作品で隠れキリシタンたちが長い間大切に納めてきた納戸神も、イエスの像でなく聖母マリアの像である。納戸神は聖母マリアの姿というよりはごく粗雑で稚拙な絵で、どこにでもよく見られる女性、母親の姿として変質された田舎農婦の絵にすぎない。でも納戸神を見るためわざわざ隠れキリシタンが住む島を訪ねる主人公<私>は、彼らの絵で「彼らもまた、この私と同じ思いだったのか」(479頁)という感動を受ける。主人公が感じる感慨は次のようなものであった。

---

[10] マンジェラ・ヴォルペ『隠れキリシタン』(南窓社、1995)

昔、宣教師たちは父なる神の教えを持って波涛萬里、この国にやってきたが、その父なる神の教えも、宣教師たちが追い払われ、教会が毀されたあと、長い歳月の間に日本のかくれたちのなかでいつか身につかぬすべてのものを棄てさりもっとも日本の宗教の本質的なものである、母への思慕に変ってしまったのだ。(479頁)

『母なるもの』の主人公は作家で、母親によってカトリックに入信するが、カトリックもよく知らないし、子供の頃も母親を嬉しがらせる子であったよりは、嘘をつき、気を腐られる人であった。しかし母親の死後、母親の形見で「哀しみの聖母」像を発見した彼は、それを20余年も経た今でも大事に納めている。歳月を経るに従って戦争の空襲で焼いてこわれた聖母像は、もう顔の表情もなくなって、残っているのは、ただ哀しみだけである。そんな聖母像を彼は、臨終の時苦しそうな表情で目を閉じていた母親のイメージと重ねて思う。とうとう山の中に潜んで住む隠遁者たちから納戸神を見た主人公は、稚拙な絵で見た平凡な母親の姿で自分が持つ「哀しみの聖母」像の顔、即ち、母親の顔を発見して深い感慨にふける。そしてその瞬間、後で両手を合掌し哀れみの目で＜私＞を凝視する母親を感じる。しかし、このように＜私＞が納戸神で発見したのは単に母親の存在だけではない。いつの間にか、母親の持った聖母像と母親を同一視していた彼は、納戸神を通して人間の苦しみを知る哀しみのマリアを発見した。顔の表情は消えて哀しみだけが残った聖母像と、納戸神として伝えられてきた農婦の絵で＜私＞が見たのは、自分の母親であり、母親と同一視していたピエタ[11]としてのマリアであった。以上のように主人公が稚拙な絵を神物と思って、神とのとりなしを祈った隠れキリシタンたちから発見した神は、聖母マリアであり、神と人間の仲裁者であり、許しと理解の神、子の苦痛に嘆き哀しむ母性的な存在であった。

3.3 『深い河』の場合

『深い河』にも母性的な存在としての神は現れているが、以前までの母性的な神とは違って独特に描かれている。以前までの母性的な性格の神が日本的な母親の姿を代表する哀しみの聖母マリアであったとしたら、『深い河』は作品の背景になったインドの女神チャームンダー[12]を母性的な存在の神として選んで造形している。これは、カトリック的な聖母の性格を拡大してヒンズー教の

---

[11] ピエタは嘆きの聖母像という意味で、十字架で死んだキリストの遺骸をひざに抱き、嘆いている聖母マリアの画像や彫像などを指す。

女神からも神を発見したことに、その特徴があると言えるかもしれない。

もともと、遠藤は聖母マリアを高貴に評価するのをはばかっていた。むしろ遠藤はマリアという名前と彼女の家柄がごく平凡な家にすぎなく、彼女が目立たない女であったのを強調しようとした。そして、聖母マリアが平凡な家柄、普通の女性で、被造物である人間であった点に、もっと親近感を感じながら「キリストが我々と同じように人生の苦しさ、惨しさを味わわねばならぬ一人の平凡な庶民の娘を母親としてえらんだことを皆さまに考えて頂きたい」[13]と言っている。これはイエスが人間の苦痛を理解し得たのは、彼の母親マリアがあらゆる苦しみと痛みを味わわねばならない人間であったからだと解釈できるだろう。『深い河』でヒンズーの女神チャームンダーは人間の苦痛を分かち合い、人間に愛を教えてくれる存在として描写されているが、この点からもチャームンダーは遠藤の思った聖母マリアとつながる。小説で描写されたヒンズーの女神チャームンダー引用してみると、次のとおりである。

「彼女の乳房はもう老婆のように萎びています。でもその萎びた乳房から乳を出して、並んでいる子供たちに与えています。彼女の右足はハンセン氏病のため、ただれているのがわかりますか。腹部も飢えでへこみにへこみ、しかもそこには蠍が噛みついているでしょう。彼女はそんな病苦や痛みに耐えながらも、萎びた乳房から人間に乳を与えているんです。…<中略>…彼女は……インド人の苦しみのすべてを表わしているんです。長い間、インド人が味わわねばならなかった病苦や死や飢えがこの像に出ています。長い間、彼等が苦しんできたすべての病気にこの女神はかかっています。コブラや蠍の毒にも耐えています。それなのに彼女は……喘ぎながら、萎びた乳房で乳を与えている。」(220−221頁)

自分も病苦や痛みに耐えながらも乳房から乳を出して、それを人々に与えているチャームンダー。これはすぐ母親の子に対する至高至順の愛とも通じる。ヒンズー教の女神チャームンダーはインド人のすべての苦痛を受け入れて、苦しんでいるインド人に自分の萎びた乳房で乳を与えている。聖母マリアはすべての人間の母親であり、母性愛の代表的な象徴である。インド人の母親チャームンダーと聖母マリアは、象徴的な母性の存在である点で意味が相通されてい

[12] ヒンズー教でチャームンダーという女神の名はチャンダとムンダという悪魔を殺した女を意味する。チャームンダーはカーリー、カラーラーと一緒に、狂暴で恐ろしい女神として知られている。

[13] 遠藤周作『聖書のなかの女たち』(講談社、1972) 73頁

る。だが、長い間神格化されて美しく飾られた聖母マリアとは違って、チャームンダーは決して美しい姿態でない。いや、むしろ老いて恐い老婆であって、聖なるものというよりは醜い存在に近い。

「印度の聖母マリアのようなものですか」「そうお考えになっても結構です。でも彼女は聖母マリアのように清純でも優雅でもない、美しい衣裳もまとっていません。逆に醜く老い果て、苦しみに喘ぎ、それに耐えています。このつりあがった苦痛に充ちた眼を見てやってください。彼女は印度ド人と共に苦しんでいる。……その苦しみは現在でも変っていません。ヨーロッパの聖母マリアとちがった印度の母なるチャームンダーなんです」(222頁)

上の引用文は、ガイド江波の言葉である。彼は一群の観光客を普通の旅行コースにはない、ヒンズー教の寺院ナクサール・バガヴァティへ導いていく。彼はインドで印度哲学を研究したインテリで、4年間も勉強して学位を取得したが実際に帰国すると大学の研究室には席があいていなくて、生計のためインドの観光ガイドでもしなければならなかった人物である。江波が観光客を導くこの寺院は一般的なインド旅行の観光コースでなく、彼が特別に思う場所である。彼は必ず観光客と一緒に行かなくても、「この町に来るたび、この像の前に立たなかった時はありません」(221頁) というほどチャームンダーに魅了されている。そんな彼が観光客たちにチャームンダーに対して烈弁を吐くたび、心の奥で連想するのは、夫から棄てられて、あらゆる苦しみに堪えながら自分を育てくれた母親である。彼はヒンズーの女神チャームンダーから、自分を育ってくれた母親の姿を発見していたのである。江波の案内でチャームンダーを見る美津子もまた、ガンジス河を母なる河と紹介する江波の案内を聞きながら、「印度の母。母親の持つ、ふくよかな、やさしさではなく、喘ぎ生きている皮と骨だらけの老婆のイメージ。にもかかわらず彼女はやはり母親だった」(224頁) とチャームンダーを思い浮べる。このように見ると聖母マリアとチャームンダーは、たとえ宗教も異なるし、描写された姿も異にしているが、母親であった点は共通している。また、彼女たちに共通する愛の意味は慈悲深い母性愛であった。遠藤は中期以降作ってきた母性的な存在としての神を『深い河』には＜印度の母親チャームンダー＞にまで広げながら、とうとう自分が思った神、母なるものとしての神を具現することができた。

以上のように、小説のなかに現れた母性的な存在としての神の姿と、彼らの持つ意味を探ってみた。前期作の『海と毒薬』には、ごく微かにみすぼらしい老婆に映った母なる性格の神とヒルダに投影されて優越な位置を占有していた

聖母マリアは、病床体験後書かれた『沈黙』と『母なるもの』などの中期作品を通して、日本の隠れキリシタンたちが信じる地母神的な神と結合されて、子のため嘆く悲嘆の母性に変っていた。また、後期作の『深い河』では、人間の苦痛を感じて人々の罪を許す仲裁者であり、ピエタであったマリアは、インドで発見したヒンズーの女神チャームンダーに変化していた。そして、チャームンダーは実際ヒンズー教ではただ狂暴な神に過ぎないかも知れないが、遠藤の作品では人間の苦痛を分ちあうため悪さと醜さまでもひっくるめて抱える女神化される。言いかえれば、自分の持つすべてを人間に与えるインドの聖母マリアであった。このように母性的な存在としての神の姿は歳月が経ちながら多少聖性が落ちて、外形はみすぼらしくなったかもしれないが、母性的な存在としての神の持つ愛の意味はいよいよ拡大されて深くなっていた。

4.「愛の働き」としての神

以上のように、遠藤において神とヒルダや納戸神、チャームンダーのような存在を通して具現されていたのを探ってみた。その結果、遠藤の特徴的神は母性的な神を意味していた。そして、このように形象化された神に愛の意味が強調されていたのはいうまでもない。遠藤の神は、父なる神を棄てて母なる神だけを強調した面では、一般のカトリック信者には異端的に見える恐れがある。また、幾分キリスト教の神とはかけ離れた感じがするのも確かである。これは遠藤もよく知っていて、彼は自分を一種の「無免許運転者」[14]と称している。言わば、自らを正統的なキリスト教の免許を取らない無免許信仰人だと言うのである。ところで、逆説的なのは、遠藤が造形した神はキリスト教の本質である愛を強調していたのにもかかわらず、むしろその愛の強調によって彼が異端視されたということである。では、果して正統的なキリスト教信者と遠藤にはどんな差があってこういう結果が生じたのであろうか。それを遠藤は最後の純文学小説の『深い河』を通して捉まえようとした。そして、そういう遠藤の信仰観は、『深い河』で主人公大津によって代弁されている。従って、次にフランスでカトリックから異端視されていた大津の信仰観を通して、遠藤の神が異端視される根本原因について具体的に検証したい。

少年の時から、母を通じてぼくがただひとつ信じることのできたのは、母の

---

[14] 佐藤泰正・遠藤周作『人生の同伴者』(新潮社、1993) 72頁

ぬくもりでした。母の握ってくれた手のぬくもり、抱いてくれた時の体のぬくもり、愛のぬくもり、兄姉にくらべてたしかに愚直だったぼくを見捨てなかったぬくもり。…<中略>…玉ねぎとはこのぬくもりのもっと、もっと強い塊ーつまり愛そのものなのだと教えてくれました。…<中略>…母のぬくもりの源になったのは玉ねぎの一片だったと気がつきました。(188頁)

この説明からもわかるように、大津の信じるのはただ一つ母親のぬくもり、即ち、「玉ねぎ」の愛である。「玉ねぎ」とは神を信じない美津子のため大津が神という呼称にかわって使用している単語である。大津は神という単語に本能的に拒否感を感じる美津子に、神を「ならばイエスという名を愛という名にしてください。愛という言葉が肌ざむく白けるようでしたら、命のぬくもりでもいい。そう呼んでください」(195頁)と言う。大津にとって神とは、愛と同時に、愛の塊りであるイエスを意味すれば、それが「X」と呼ばれても、「玉ねぎ」や「トマト」と呼ばれても、呼称はいずれにしてもかまわないのである。

大津の信仰観は、愛と愛の塊りであるイエスを信じるという信心自身においてはあまりキリスト教の本質から違背していない。しかし、次のような彼の言葉、「結局、ぼくが求めたものも、玉ねぎの愛だけで、いわゆる教会が口にする、多くの他の教義ではありません」(188頁)には、異端的な面がこめられている。愛の神だけを信じて、人間の罪を罰して審判する神は拒む、そうして教会の教義よりは神の愛だけを「信頼」[15]している大津の考えには、確かに異端的な面が存在する。また、大津もこういう自分の考えが「異端的と見られた原因」(188頁)であるのを知っている。即ち、愛だけを度外れに信じて、信頼する傾向自体が逆に異端的な性向を帯びるに至ったのである。

ところが、大津はフランスまで行って、あなたにとって神とは何かを問う美津子に、「神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊りなんです」(99頁)と、<愛の働き>としての神に言及している。彼の言葉によると、神は必ず目で確認しなければならない対象でなく、愛の働きである。そして、そういう神が活動することによって、その結果、人間の生涯に自分の意志とは関係ない変化が生ずる時、人間は、神が活動として人間のそばに一緒にいるのを感じて、神の存在を信じることができる。

大津の言葉は、『私にとって神とは』でしばしば<神とは働き>と言っている遠藤の言葉とも一致する。『私にとって神とは』というエッセイを通して、

---

[15] 大津は美津子に「ぼくは玉ねぎを信頼しています。信仰じゃないんです」と告白している。

遠藤はそのあいだ自分に降り注いだ信仰的な質問をまとめて答えている。これを読むと、遠藤の信仰観が『深い河』の大津とまったく一致しているのがわかる。このエッセイからも遠藤は、神は存在を証明することはできないが、働きを感ずることはできるものだと述べている。では、この本で遠藤が明かす＜愛の働き＞としての神は、いかに書かれているのか。

もしあなたが私がいままで話してきたことを聞いて、キリスト教に興味を持つ、やがて洗礼を受けたとすると、神は直接目に見えるわけではないけれども、私という者を通してあなたに働きかけたことになる。神はいつも、だれか人を通して何かを通して働くわけです。私たちは神を対象として考えがちだが、神というものは対象ではありません。その人の中で、その人の人生を通して働くものだ、と言ったほうがいいかもしれません。（傍点は遠藤）[16]

このように神を＜愛の働き＞として観念化させていた遠藤の見解は、『深い河』の中で、美津子に棄てられて戸惑っていた大津が、「おいで、という声を。おいで、私はお前と同じように捨てられた。だから私だけは決して、お前を棄てない」（97頁）という神の声、または神の働きを感じて、以前まで惰性的な信者から一変してまじめな求道者にかわることにおいて、もっとはっきり裏付けられている[17]。

ところが、このように神を観念化する考えこそ、母性的な神という遠藤だけの独特な神が生まれるようになった根源的な要素で、これによって遠藤は異端児としてカトリックから批判を受けたのである。そして、神は＜愛の働き＞という見解により、遠藤は作品のなかで人間と動物、自然物など神の被造物に過ぎない存在らを神格化し得たのである。人間と動物、自然物などに＜愛の働き＞として活動する神の働きを附与し、知らず知らずに変化される登場人物たちの人生を描写することによって、遠藤の神は誕生していたのである。こういう意味で、外の人々と区別される遠藤の神は＜愛の働き＞を意味する概念であったから「玉ねぎ、トマト、X、命のぬくもり」など呼称はどうなっても、必ず愛の意味だけが籠められていて、またそれが人間に感じられることができたら、人間と自然、生物と無生物を出入りしながら現れるのであった。

作品で大津は単純に宗教の差を「人がその信じる神をそれぞれに選ぶのは、生れた国の文化や伝統や各自の環境による」（191頁）ことと見ていた。自分自

[16] 遠藤周作、『私にとって神とは』（光文社、1983）20頁

[17] 『沈黙』にも沈黙を破る「踏むがいい」という神の声は目には見えない観念的な声で、主人公のロドリゴにのみ感じられる声として表出されていた。

身は外の日本人とは違って母親の影響によりキリスト教信者になったが、それは単純に外形だけを借りたので、イエスも釈迦もヒンズー教の神も、その意味はみんな愛という一つの意味でお互いに繋がっているのだと思っていたのである。こういう論理で大津は神という漢字の意味を、玉ねぎやトマト、X、命のぬくもりなどと対称して使用していたし、こういう単語に籠めている意味は、結局＜愛＞であり＜愛の働き＞、ひいては＜愛の塊である神＞までも意味するのであった。＜愛の働き＞として神を見つめていた大津が、宗教について持っていた見解は次のとおりである。

> 最もぼくが批判を受けたのは口頭試問の、「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います」と発言した時でした。…＜中略＞…神は幾つもの顔をもたれ、それぞれの宗教にもかくれておられる、と考えるほうが本当の対話と思うのです。…＜中略＞…ぼくは玉ねぎの存在をユダヤ教の人にもイスラムの人にも感じるのです。玉ねぎはとこにもいるのです。(192－196頁)

このように大津の見解を探ってみると、遠藤にとって宗教とは神を入れる容器のようなものであったと思われる。そして、その神は眼には見えないがその活動によって人間が感ずることができる、観念化されたイメージであった。だから、宗教がヒンズー教や仏教、イスラム教など各自異なる顔をしていても、その中に盛られている内容がいつも同じもの、神の愛ならすべての宗教は同じ神が盛られた別々の容器にすぎない。即ち、各々の宗教に神の愛を表わす活動が籠っていれば、別々のものだと思った宗教が実は一つの神に行く別個の方法にすぎなかったのだとも言えよう。遠藤は作品のなかでも、「すべての宗教は同じ神から発している。しかしどの宗教も不完全である。……同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異った道をたどろうとかまわないではないか」というガンジーの言葉を引用した後、「大津の好きなこの言葉、彼がまだこの語録を知る前に、同じような気持を抱いていたため、神学校でも修練院でも上司の顰蹙をかい仏蘭西の同輩の反感と軽蔑とを起させたこの言葉」(306頁) と大津の考えとガンジーの語録を合体させている。こうすることによって、遠藤はどんな宗教も神の意味が同じなら神は一つだという自分の信仰観を裏付けて表出していたのである。

平素、遠藤は日本人はその気質において真正の意味で神を知りえないと思っていた。だから、作品のなかで絶えず日本人と神との問題に悩んでいた遠藤

が、最後に形象化した神は＜愛の働き＞の主体で、どんな対象を通しても作用する、日本人が肌で感じ得る存在であった。そしてその対象は、＜愛の働き＞を通じて＜愛＞という観念を人々に確かに伝達してくれれば、何でも神格化されることができた。遠藤は日本人を＜愛の働き＞を知らない人間と思ったから、日本人が世界のなかで融和されて共存し得るためには、神の問題を必ず探究しなければならないのだと思っていたかも知れない。そして、そのためイエスの愛、神が持つ愛を＜愛の働き＞として具体的に表して、その愛の意味を日本人に深く伝えようと努力したと思われる。言い換えると、キリスト教を受け入れようとはしない日本人の感覚と、目に見える現象だけを信じるとする日本人たちの気質に、＜愛の働き＞としての神を感じることを訴えていたのが彼の作品の世界であった。

5．おわりに

以上のように、本稿では遠藤周作の文学が集大成された最後の代表作『深い河』を中心に、初期作の『海と毒薬』や『沈黙』、『母なるもの』なども含めて作家が絶えず描いていた神の形象及び意味を探ってみたところ、次のような結論に達した。まず、遠藤は多様な存在を神として形象化していた。第一に、ヒルダや大津のような人間がいる。第二に、ガンジス河などの自然物や、人間の素直な話しを聞いてくれる存在として動物たちが登場する。[18]第三に、ヒンズー教の女神チャームンダーがいる。

小説の中で多様に表出されているこのような存在を通じて神の意味をもっと具体的にまとめて見ると、次のことがわかる。まず、遠藤が取捨選択して描いた神は、怒鳴ったり怒ったり悪を裁く父性的な神ではなかったのである。『沈黙』で「踏むがいい」と聞こえる神の声や、『母なるもの』で聖母マリアの絵をまねて描かれた納戸神の絵、そして、『深い河』で自分の苦しみを我慢しながら萎びた乳房で乳を与えている女神チャームンダーの像は、すべて作家の思っていた神が母性的な神であることを意味している。のみならず、遠藤はこういうユニークな神を作品の中に造形化することによって、すべての万物に神の＜愛の働き＞がこめられていて、また、それを人間が感じ得て神の愛を信ずると、それがすぐ神になるというメッセージを読者に語ろうとしていたと思われる。

[18] 『深い河』にはガンジス河やチャームンダー以外にもカストンという人物、沼田の動物たちなどが神的な存在として登場し、遠藤の神は汎神論的な性格も持っている。しかし、遠藤が描いた神の汎神論的な傾向について述べるのは今後のことにしておきたい。

遠藤において＜神＞は、＜愛＞というキーワードで代置し得るものならそれで足りたから、その働きだけが感じられると、それはみんな神になった。したがって、＜深い河＞という題目が意味するのは単純にガンジス河だけを意することでなく、人間を抱いて許す大きな存在であり、この世とあの世を連結する大きな生命をも意味していた。

結局、遠藤文学での神が意味することを一言でいえば、遠藤の神はキリスト教での愛の神イエスが強調されたもので、異端視される危険にもかかわらず、多神的な日本の風土に合わせて仕立て直された神であったと言えよう。

以上述べたことから見ると、作家は神のもつ愛の意味を、そして神の＜愛の働き＞をこめている存在を作品世界に具体的に表わすことによって、真の＜神＞の愛の意味を日本人に深く伝えられるように努力していたと言えるだろう。

参考文献

本文及び註に記載したものは省略した。
遠藤周作『春は馬車に乗って』文芸春秋、1992
遠藤周作『切支丹時代―殉教と棄教の歴史―』小学館、1992
遠藤周作「母なるもの」『日本の文学72』、中央公論社、1969
林道義他『こころの不思議、神の領域』ＰＨＰ文庫、1991
河合早雄他『心の海を探る』角川文庫、1990
江藤淳他「遠藤周作」『群像日本の作家』第22巻、小学館、1991
林　鐘碩「遠藤周作の『深い河』論」『日本文化学報』第２輯、韓国日本文化学会、1997
高橋たか子他「遠藤周作と椎名麟三」『鑑賞日本現代文学25』、角川書店、1983
佐藤泰正「遠藤周作と椎名麟三」『佐藤泰正著作集７』、翰林書房、1994
久保田暁一『日本の作家とキリスト教』朝文社、1992
青山　玄「キリシタン信仰生活の中での日本的伝統」『キリシタン文化研究会会報』、1985
武田寅雄他『日本現代文学とキリスト教―昭和編―』櫻楓社、1974
金　恩暎「遠藤周作の小説研究」、韓国中央大学大学院修士論文、1998